

第一回

開口一番



プロローグ 1

マユ

物書きとしての私は「誇張はするけど作らない」のがポリシーです。いえなに、単に創作力がただけなんですけどね。

第一回目は佐藤先生が本章の「蘭方編」の手書き原稿を我が家に突然ファックスしてきたところから始まりました。「漢方編」の後段「地域医学読者の皆様へ」のところで書いたこと、紛れもない事実として、さほどの誇張すらしていません。

ファックスの4～5日前、確かに二人とも一杯機嫌の時間帯に「月刊地域医学誌に漢方医学の解説連載を、くだけた調子でやったら面白いかもね……」てな電話でのやりとりがございました。本文でも書きましたが、まさか本当に始めるとも思ってませんでしたし、実際やるにしても、あそこまでくだけた文体と内容で書いてくるとは思ってもいませんでした。

彼が生まれ育ったのは東京の下町、そこは私の父が育った地でもありまして、同町内に親父の同級生I氏も暮らしており、私が

自治医科大学に入学することが決まったとき、I氏が父に電話してきて「佐藤純一って面倒見のいい若い衆がいるから、あいさつしとけ」てなやりとりがありまして、学生寮に入寮したその日からしっかり面倒みてもらったという仲なのです。具体的にはアブサンという強烈なりキュールの一気のみという洗礼でしたが。

後輩にとって先輩という存在は永遠に先輩でして、ちょいと命令には逆らいがたいものがあります。それに私自身、柔らかエッセイなら書くこと嫌いじゃありませんので、つついその気になりりレーエッセイの第一回目を書いてしまったというわけです。

二回目からは形式が変わるのですが、まずは第一回目。蘭方のたわ言と漢方の寝言エッセイ二本立てお楽しみあれ。

【蘭方編】



「ガッハッハッ。モシモシ、哲っちゃん。ワシ。石岡のインチキ蘭方医。いやー、哲っちゃんも義理堅い。アタシの本の書評まで書いてくれもちゃって。ホント、世の中ってえヤツ、持ちつ持たれつだね。ショーバイってえのはアキナイてえぐらいなもんだ。働くってえのはハタの人をラクにするためにやるってえことを言う。そういうつもりで精出してりゃあ、そのうちお互い運も開けてくるってえもんだ。ねえ、そば屋さん（誰が?）。また何かの機会にこの調子で仲間褒めに励もうじゃねえか。え？ 月刊地域医学でまた何かやる？ いいねえ。一体何をやろうってえんだい。フーン。漢方をしらない蘭方医と、蘭方を知らない漢方医のリレーエッセイ？ そりゃ面白い。アガワとダンフミの線で。本にして売れたら印税は山分け？

ガッハッハッ。小さいよ。ノーベル文学賞と芥川賞を目指しましょう。じゃあ、とりあえず、それ載せてくれるかどーか、藤本健

ちゃんに電話して聞いてみるから。じゃあね。」

「モシモシ。神経内科の医局でいらっしゃいますか。ワタクシ、石岡第一病院の内科のサトウと申します。いつもお世話になっております。ちょっと患者さんのことでご相談がございまして、藤本助教教授をお願いしたいのですが……。…………モシモーシ、あっ、健ちゃん。ワシ。東京都第3期、佐藤純一。いいでしょ。競輪選手の紹介みたいで。ガッハッハッ。え？ 患者さん？ ウソだよーん。だまされた？ まあいいや、実は別の用事なのだよ。…………というわけで、ワシと下田の哲ちゃん、月刊地域医学、全国1000万読者（そんなにいるかな？）のために、この誌面をお借りして、蘭方が知らない漢方の常識、また漢方が疑問に思う蘭方の知識を、面白おかしくお伝えしようってわけだ。どーだい。書いてもいい？ 書くよ。えっ、書いたら書いちゃうよ」

というわけで、迷惑電話と災難は忘れた頃にやって来る、藤本先生、ごめんなさい。

実は私はシャイな人間でして、シラフでは電話や目覚まし時計が大の苦手なのです。眺めているだけで何時鳴り出すんじゃないかとドキドキしてしまいます。ところがその反動なんでしょうか。一旦、酔払うともう誰かに電話したくて我慢できなくなるのです。フウッ。我ながらイヤな性格。

そう言えば酔った勢いで北海道の同級生の自宅に節税マンションのセールスマンを装って電話した時は面白かったですね。奥さんがドキマギしてました。用もないのにわざわざ北海道まで電話した甲斐があったというものです。また、開業したての友人のクリニックにわざと夜中に電話して、留守番電話に古典落語「黄金餅」の言いたてというヤツをたっぷり入れた時には、一同ホントにくたびれた。やってるアタシもくたびれたというぐらいで……。ホント、くだらない。誰か被害に合ってもいいとおっしゃる方がいたら名乗り出て

下さい。いつでも迷惑電話をしてあげましょう。酔払ったアタシ、あまり友ダチになりたくないですね。シラフのアタシより。

インチキ漢方医こと下田哲也先生もそう思ってらっしゃるかも知れません。月刊地域医学の編集長、藤本健一先生は絶対そう思っているはずです。しかし、酔った勢いとはいえ事実、約束は約束。バカなことを書きつつ、誌面ジャックのいきさつを読者の皆さんにバラしてしまうのです。とはいえ、いずれ出て来るのは妄言、駄言、たわ言、寝言。そこでこのタイトルを「蘭方のたわ言、漢方の寝言」としました。ウン、うまい。座ぶとん一枚。もう半分以上書けたも同然です。昔、夏休みの初日に半日がかりで夏休みの勉強計画表を立てて、ホッとしてあとは遊びまくったことを思い出します。

しかし、そこは言い出しっぺ。今回は蘭方のたわ言をたっぷり聞いていただくじゃありませんか。いいかい、行くよー。

そもそも、蘭方を全く知らない漢方の読者の方々。今時、そんなヒトがいるのかどーかはともかく、そういうあなたにまず蘭方の第一歩をお教えしましょう。まずあなたは漢方の知識を捨て、杉田玄白の弟子になって「ターヘル・アナトミア」を携えて小塚っ原で腑分けを見学するべきです。あなたが理解している五臓六腑と現物がいかに違うかがわかるでしょう……って、いつの時代の話なんでしょう。逆に言えば、アタシら、蘭方は、漢方のヒトが言う五臓というヤツがよくわかりません。脈を触ってベロを診て、「フーム、アータは腎の虚でげすな」なんてことを言われてタツノオトシゴの干乾しなんか処方されるともう何が何だか。「フェッ？ 何でワシ腎臓なんだろう。虚実、陰陽って丁半バクチみたいなもんかい？」ってなもんです。蘭方ではこういうケースは、「フーン、立たないの。じゃあこのアンケートに答えて。フームあなた ED (勃起不全) ですね。バイアグラ®でもどーですか」という話になります。この方

がわかりやすいんですけどね。

時に、話はちょっとそれますが、あのEDアンケートも、もう一工夫必要でしょう。あれだけではわからないことも少なくありません。「手作り弁当は飽きちゃったけど、レストランの外食ならまだ食べられる」というわがままなヒトはどーなるんでしょうか。それぐらいなら、バイちゃんよりタツノオトシゴの方がいいんですかね。アタシのことじゃないんですけど。ブツブツブツ。何の話でしたっけ。まあいいや。とにかく漢方における五臓ってえヤツを蘭方にわかるように説明してもらおうじゃないの。えっ、どーなってるんだい、一体。フッフッフ。さりげなくこの後の「漢方の寝言」につなげるというシブイ芸です。

それと漢方薬ってえヤツ、どーして食前に飲むんでしょうか。ペイスン[®]、グルコバイ[®]じゃないんだから。本場中国では食後に服用するケースもあるんだとか。日本酒は食前だけど、マオタイ酒は食後に一杯ってことなんじゃないですか。よくわかりません。そういえばアタシが愛用しているクスリに「カナボウ般若湯エキス」ってえヤツがあります。これは効きますよ。多少ハラ壊してようが、ストレスたまってようが、風邪ひいてようが、夕食前に1日1回服用すると、朝には全部すーっと治っちまう、ホント、鬼に金棒のようなクスリなんです。どーしてこんなによく効くクスリに健康保険がきかないのか、何で社会保険本人、2割負担^{注1)}で買えないのか、常々疑問に思っています。

「へーえ、そんなによく効くクスリがあるの。成分を教えてくださいなさい」。はいはい、般若湯エキスのびんが置いてありますから、今から成分を読み上げます。「米、米こうじ、アルコール……」。フォーム、すばらしい。やはり漢方は葛根湯より小柴胡湯より、般若湯に

注1) 現在は3割負担です。